

# 図ればルールが曖昧に 融通が利かなくなる



## 菅野 龍太郎氏

法律事務所Z パートナー弁護士

栃木県出身 1988 年生まれ。 2012 年慶應義塾大学法学部法律学科卒業。  
2014 年慶應義塾大学法科大学院修了。同年司法試験合格、最高裁判所司法研修  
所入所。アンダーソン・毛利・友常法律事務所入所後、パークレイズ証券株式会  
社出向、アマゾンジャパン合同会社入社を経て、都内の企業法務を専門に扱う法  
律事務所に参画、2022 年、法律事務所 Z を設立。多数のクロスボーダーを含む  
M&A、訴訟・紛争解決、エンターテインメント法務、金融法務、一般企業法務  
等に従事しており、渉外案件に強みを持つ。また、アマゾンジャパンでの経験か  
ら、会社法のみならず決済関係法務にも精通し、新たな決済手段の導入や法令順  
守体制の構築も手掛ける。

山で遊びテレビゲームに夢中だった少年時代  
希望するゲームクリエイターの才能はないと自覚し  
両極端にある弁護士への道を決意  
4 大法律事務所のひとつに入所後転職して独立を果たす  
弁護士はバリエーションのある楽しい仕事だ



# 法律は具体的な解決を 基準を明確にすれば

本来自由な社会で権利がぶつかり合い  
法律に縛られて不幸になるのは本末転倒だと  
「適法か違法か」より何がいちばんの解決策かを模索するのが大事  
弁護士業界で生きていける秘訣は専門性を高めていくこと  
相談者に寄り添い関わってくれた人を幸せにしたい・・・



## 田中 隼人氏

作・編曲家 音楽プロデューサー

東京都出身 1979 年生。20 代前半から作編曲家として数々のアーティストとのコラボレーションを果たす。映画「LIMIT OF LOVE 海猿」の主題歌となった伊藤由奈「Precious」の作曲や、FUNKY MONKEY BABYS 初の NHK 紅白歌合戦出場曲となった「ヒーロー」の作曲、プロデュースなどで音楽家としての地位を確立。編曲・サウンドプロデュースを手掛けた、映画「打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？」の主題歌である DAOKO × 米津玄師「打上花火」の MV は再生回数が 5.9 億回を突破。フジテレビ系月 9 ドラマ「ナイト・ドクター」では総合的な音楽プロデュースを務め、yama・Tani Yuuki・eill・琴音など新進気鋭の若手アーティストを劇中の楽曲内で起用し話題になる。CM、劇件を含めたあらゆるシーンで音楽を作り続ける傍ら、テレビ・ラジオ・雑誌等でも活躍中。

## 弁護士の仕事は AIでどう変わる？

**田中** 今日は、弁護士の菅野龍太郎さんを指名させていただきました。どうぞ宜しくお願いします。

**菅野** こちらこそ宜しくお願いします。

**田中** 菅野先生とお会いしたのは、僕が弁護士の先生を探していた時に友人から、同じフロアに弁護士事務所があるよ、と紹介してもらったのがきっかけです。僕の個人的な音楽事業の、法律のちよつとした採め事があって、その問題を解決していただいたのが最初です。

**菅野** 2024年でしたよね。去年の夏前頃にご連絡をいただいて、今年にかけて解決したという様な感じですね。

**田中** その後も、僕がファウンダーと取締役で入っているベンチャーがあるのですが、その会社の顧問というか、契約している弁護士さんになっていただいて。そこからずっと関係性が続いています。

**菅野** ミュージシャンの方に初めて



菅野 龍太郎氏

お会いしたのですが、クリエイターというのは一般的にちよつとクセのある人が多いでしょう。でも田中さんは「クラスの人気者」タイプの様な感じで、どこに行っても何をやってても成功するタイプだなという印象で、逆に衝撃的でしたね。

**田中** えっ、ありがとうございます（笑）

**菅野** お話していても頭の回転がすごく早くて、全方位的に能力が高い人だな、という印象を受けました。  
**田中** 僕は、他の先生の様な、いわゆる「ザ・弁護士」っぽくない人とお仕事をさせていただいた方がやりやすいですし、楽しいです。ずっと

ファニーな方に出会えてよかったと思っています。

**菅野** そうでしたか（笑）

**田中** ところで最近、生成AIなど、AIの話題が世の中に増えてきて、株式市場的にもAI銘柄が高くなったり、アメリカのAI企業が1兆円調達したとかのニュースが多くなつて、日本の会社でも生成AIがかなり使われる様になりましたね。うちのベンチャーはAIがメインの会社なのですが、まだ法整備がされていませんよね。現在どこまで生成AIを使って法的にセーフなのか、線引きはどうなっているのか教えていただけますか？

お付き合いを続ける弁護士の先生とというのは、仕事だけではなくて、例えばプライベートでお食事に行ったり、お酒を飲む様な場に行った時にも、ざつぱらんに話せる方にお願したいと思っています。

**菅野** いろいろな権利との関係で、いちばん議論が進んでいるのは著作権でしょうか。例えば、人の顔を肖像権として採り入れて生成した場合かどうか、声はどうか等々ありますが、そこらはまだあまり話が進んでいない状況だと思います。一方で著作権に関しては、文化庁等も委員会を設置して見解を出したりしています。「著作権法」という法律が既存であるので、それと著作権を絡めた議論は進んでいます。生成AIを作る時には、「生成AIを作る」という学習をさせる段階と、それをユーザーが使って新しい画像や、「何かアウトプットを作る」という段階のふたつがあつて、夫々において著作権侵害というのが、どういう場合に認められるのか、という様な議論はかなり進んでいます。

**田中** でもAIの技術のスピードもかなりですよ。

**菅野** そうですね、問題はAIの技術がものすごいスピードで発達しているの、その時その時の技術レベルでという話しかできません。ですから、その見解というの、AIの技術が進歩するとまた前提が変わっ



て、考え直しの様なこともあり得る領域かな、とは思っています。

**田中** そろそろ法整備はされそうですか？

**菅野** 明確に法整備というのはちよつと難しいかな、と思っっています。どんなに変わつてその段階で何かを決めてしまうと、それをまた変えるのが大変になるので、具体的な中身があつてAI法みたいなものを作るのは現段階では難しいと思います。ただ、今年、一応AI法みたいなものを作りましようという動きがあつて、国会に提出はされました。しかし内容的には、国の考え方や方針を示すもので、具体的ではないですね。

**田中** 具体例を挙げてというのではなく、包括的な話しか進んでいないですね。

**菅野** そうですね。

**田中** 例えば、作曲という事であると、自分が作った曲が既存の曲に似ていると訴えられる裁判が、過去にもある判例を元に、何小節以上似ていたら駄目だと。その場合AIが生成したものが世に出た時、それに似ている曲とかまたは絵を持っている

人が訴えた時に、AIが悪いのか、そのAIを動かした人が悪いのか、これが本当に元の模倣なのか、結局判断がつかない。結局今判例がないし、モデルケースがないから判断できないけれど、裁判を1回起こして誰かが判断しないと、その判断基準はできないのですか？

**菅野** それはある程度、現在の著作権法と近い考え方で結果が予想できます。普通の著作権侵害を判断する時に類似性と依拠性というのがあつて、簡単に言うと、似ているかどうかというのと、存在するモノを見て作ったよねという、このふたつがポイントです。基本的には裁判所の判



田中 隼人氏

断としても、似てる似てないというのは、自分の頭で考えても生成AIを使ったとしても同じで、その判断はあまり変わりません。では「依拠した？」という方が問題になりませんか。生成AIでは元の曲を知らなくとも作れてしまうことがあります。それについて実はある程度の見解が出ています。元の生成AIが問題になっている音楽を学習元として取り込んでいるか否かで変わってきます。取り込んでいない場合は、まあ仕方ないよね、と。でも取り込んでいた場合はちよつと議論が複雑で、AI自体が取り込んだモノと似た曲が作られない様な仕組みになっているかどうかです。でもその措置が取られていないと、「著作権侵害です」と言われてしまう可能性があるのです。だからそのサービス自体が、きちんと著作権侵害への配慮をしたものなのかどうかで、ユーザー

の運命が決まってしまう。

**田中** それはとても専門的な話で、要は、アルゴリズムとかAIの内部のシステムの話で複雑だし、裁判官の人は多分判らないでしょう。

**菅野** その可能性は大いにあります。専門家からの説明を取ってくるとか、そこをいかに理解させるか、弁護士の手腕が問われるところですね。

**田中** 弁護士の戦略と手腕がかなり左右する気がしますね。

**菅野** そういう訴訟というのは世の中に結構あります。

**田中** ちゃんとAIに取って代われない仕事をされていますね(笑)

**菅野** 今のところ、弁護士の仕事も代替されるものはありますよ。例えばM&Aだと、資料を大量に読み込んでその情報をまとめる作業があるのですが、AIだとすぐにできてしまうので、今までの様なお金の取り方はできないでしょう。僕が弁護士2、3年目の頃には、とてつもない数の契約書をA3の紙にまとめて、巻物みたいなを作つて、お客さんに千万単位でチャージする様なことが普通にありましたが、もうAIに

読み込ませてポンと出せばいい。逆に残っていくのは離婚とかですね。寄り添わないといけない系は、絶対に残ります。

**田中** 弁護士の手腕が問われるようなケースの方が残りますよね。企業法務等の方が、離婚裁判よりマネタイズがしやすいです。

**菅野** そうですね。お金を払う人がお金を持っていますからね。

**田中** そういうものをAIに代替していくと、弁護士さんの数が少なくとも良さそうですね。

**菅野** 特に大手の法律事務所は料金体系がタイムチャージで、「力押し」で稼ぐことが結構あって、アウトプットに対する成果と結びついていないことが多いので、そうするとビジネスモデルを変えないと、ということになりますよね。

**田中** 契約書の内容が法的にOKかどうかは、AIでもできるでしょ。

**菅野** いやあ、これが難しくてね、AIに任せると指摘がとて細かくなって、担当者がサツと流して確認していたものが1個ずつ判断をしないといけないので逆に面倒だということがあります。

**田中** 最近、僕も日々曲を作るたびに著作権の契約書を毎回書きますし、音楽を作るたびそれ以外の権利に対する契約書も発生するので、契約書に触れることが多くなりましたが、業界の事を良く分かっている方はとても細かくて（笑）

**菅野** お客さんも細かい方が喜ぶ人と逆の人もいて、この人はこのくらいだろうとか、こんな細かい事はこの会社も相手方も守らないだろうとか、いわゆる「空気を読む」みたいな部分も、人がやっているからこそサービスがあるので。

**田中** AIは空気を読まないのですか？

**菅野** 読みません。むしろ空気を読まないところがいいでしょうね。

**田中** まあ、そうですね。業界の監修を知らない人は、契約書を見てすごく細かい箇所や、言葉尻を捉える様な赤を入れてきたりしますね。

## AIソフットの規約が 著作の権利を決める

**田中** 菅野先生の得意分野を教えてください。

**菅野** M&Aとか、あとはYouTubeuberさんとかエンタメ系のお客さんが多いですね。それ以外には男女問題とかも多少はやっています。

**田中** 幅広いですね。

**菅野** 元々企業法務の弁護士でしたが、独立するとどうしても男女関係とか、黙っていても友人とかが相談しに来るのでやるようになって（笑）

**田中** 確かに。菅野先生の良い所はコミュニケーション能力が高いので、何でも話しやすいところですね。でも、今まで知り合った弁護士の方は意外とコミュニケーション能力が高くない方も結構いらっしゃいますよ。

**菅野** 堅い方？

**田中** 堅い方も多いから、いろいろ相談できるのはいいですね。かなり幅広く様々な経験をされたのですか？

**菅野** 弁護士としても幅広いキャリアで、最初は「アンダーソン・毛利・友常法律事務所」という、いわゆる4大法律事務所のひとつに入って、その後転職して、Amazonの日本現地法人の法務部で1年半サラリーマンをして独立したという経

緯です。高校生の時にイギリスに留学をして、ボーディングスクールを卒業して戻ってきました。出身も田舎ですし、そういう意味ではちょっと幅広めに見られているかもしれませんね。

**田中** ご出身はどちらですか？

**菅野** 栃木的那須の方です。

**田中** いい所ですねえ。小さい頃はどんな少年でしたか？ 結構論破していくような……。

**菅野** もう、ガチガチに論破して……（笑）

**田中** 嫌な子どもですねえ（笑）

**菅野** 今もあまり変わっていないので、妻からも「これ以上理詰めにしたら、出て行く！」と言われていました（笑）ただ、田舎で家が山の中というのもあって、子どもの頃は山で遊んだり、一方ではエンタメとか、テレビやテレビゲームが好きで、そういうものにもかなり触れて育ちましたね。

**田中** 飛び回って遊ぶのも好き、討論をするのも好き。本当に幅広いですね。

**菅野** 運動だけはあまり真面目にやりませんでした、その他は活発に

……。

**田中** その頃、将来の夢は何かお持ちでしたか？

**菅野** 小学生の時はゲームが好きで、それこそゲームクリエイターになりました。一方で、自分にはあまりクリエイターとしての才能がないな、と薄々感じていましたね。どちらかというと消費者なので、途中で自分の能力に直面して（笑）じゃあ、変えるか、と弁護士を志すようになりました。

**田中** クリエイターから、変えて弁護士ですか？

**菅野** 両極端でしょ、自分の特性の正反対をやりたいと思っていた時期があったので。でも、このまま消費者としてこれに関わるだけでも楽しいと思いましたし、今、これが巡り巡って全く逆の能力で関わっているのは、結論的には良かったと思います。

**田中** 高校卒業された頃から弁護士を目指したのですか？

**菅野** 父親と両方の祖父母が個人事業主で、サラリーマンになるイメージが湧かなかったのもあるかもしれません。

**田中** 僕が今日、特にお聞きしたい

のはAIの生成物に対する権利の話です。僕らクリエイターは、権利ビジネスなので、自分達が作ったものの権利がどこに帰属するかというのは死活問題なのです。例えば音楽のAIが単独で作った生成物の著作権は、基本的にどこに帰属していると考えるのが一般的ですか？

**菅野** 実はですね、そもそも生成されたモノに著作権が発生するのかわからないか、というところから考えないといけないのです。こんな機械に「こんな感じ」と1行打って出てきたモノは、著作物ではないよね、と。すると、どれくらいその人が手間をかけたか、というところから総合的に判断されて、まず権利が、著作権があるかないか、発生するか発生しないかということが決まるのです。

**田中** あゝ、なるほどね。

**菅野** 発生するとすると一般的には成立で、プロンプトを打ち込んだ人や手直した人に生じるということになります。が、AIサービスの利用規約で「これで作ったモノは、全てサービス提供側のものになります」

とか「著作権は共有になります」とか書いてあると、それに従うことになるので、サービスの規約等を見ながらですね。

**田中** 利用規約は意外と有効ですか？

**菅野** 完全に有効ですね。全然意外ではないですよ（笑）誰も読まないと思いますが、仕事に関わる死活問題の人はきちんと読んだ方がいいと思います。特に権利周りは。

**田中** AIが作ったモノ、例えば写真等に人の手を大分加えてAIが作った感じではない様なモノ、に関してですが、そのAIを使ったらその著作権はベンダーに帰属するという利用規約があった場合、その著作物を使って二次的に創作物を作成した場合はどうなりますか？

**菅野** それも規約によりますが、二次的に使っているという決まりがあれば二次的に作れますが、二次的に作ったモノもベンダーに帰属するという内容なら、それもベンダーに帰属する、これは契約の「決め」で決まることが多いものですね。

**田中** 今は多くのAIのサービスがあつて、画像や音楽だけではなく文

章を生成するAIも沢山ありますが、多分誰も利用規約を読んでいないかも、ちゃんと読んだ方がいいですね（笑）

**菅野** その方がいいですね。ほとんどの場合、自分で使う目的で提供されているので大丈夫だと思いますが、念の為確認するのは必要だと思いますよ。

**田中** 本当に有象無象のAIサービスが沢山あつてどこの会社なのかもよく分からない、ベンダーのSaaSのサービス自体も中国企業なのかアメリカ企業なのか、それともその日本法人が運営しているのか等、結構バラバラですよ。中国の会社とか無茶苦茶な利用規約の会社もありますよね。

**菅野** 多分あると思います。例えば、ビジネスモデルによってはその曲を流通させる出版は、中国ではうちでは持ちます、とか書いてある可能性もありますね。日本ではどうぞ、でも中国ではこつちがやりますというコンセプトのサービスがあつてもおかしくない。

**田中** 確かに。それを知らずに日本でリリースして、後からいきなり裁

判を起こされる可能性がゼロではないということですね。

**菅野** そこはきちんと確認した方がいいですよ。

**田中** その会社内でも何か企画書とか、気軽にいろいろなAIのツールを使っていると思うので、それがそのまま「キャッチコピー」的に外に出る場合もあるでしょう。皆、権利の意識を持ってちゃんといういろいろ確認した方がいいですね。

**菅野** そうですね、基本的には会社が導入しているソフトしか使っていない、個人が勝手に入れたAI等は使わないというのが、ガバナンスの基本的なところだと思います。

**田中** 会社としてAIをちゃんと採り入れて「うちの会社はこのAIを使いましょう」という会社は、相当リテラシーが高いですよ。そんな会社はまだあまりないと思います。個人レベルで詳しい人が勝手にいろいろ使っているのが現状かなと思うので、危ないですね。

**菅野** ホント、危ないと思います。

**田中** そうするとAIっぽい生成物を見つけて、それを突っ込んで訴えたりする人も出てきそうですね？

(笑)

**菅野** ありうろと思いますよ。新時代の著作権ゴロではないですが。

**田中** 「著作権ゴロ」みたいな人が出てきてもおかしくないですよ。ね。「オレオレ詐欺」的なビジネスに使われる可能性もありますし、逆に怖いですね。そういうところに弁護士さんが活躍する場があるということですね。

**菅野** 多分、解決策は先程申し上げた通りで「会社が使ったものしか使っていない」のですが、危険性を周知しないと皆守ってくれないので、「こういう危険性があります」というセミナーや社内研修会をやるといいと思いますね。

### 「玉虫色」の解決から きっちり戦う弁護士へ

**田中** 菅野先生とベンチャー企業とで、生成AIのコンソーシアムみたいなのを設立するというニュースがありました、何をするのか教えていただけますか？

**菅野** 著作権もそうですが、AIで、例えば今だとモデルを作ったり、A

Iを作ったクリエイティブというのがだんだん増えていく中で、法律の整備がなかなか追いついていません。そこで一定の業者さんが集まって「業界のスタンダード」というのを作っていくことによって、健全に発展できたらいいな、という想いがあります。それをきちんとすることによって、クリエイター側も「権利侵害をしていない」と安心するし、もしかしたら自分のクリエイティブが使われているかも、と学習に使われるようなクリエイターさん達も「あそこがこういうルールでやっているなら大丈夫だろう」と安心してもらえるカタチがいいという風には思っています。場合によってはきちんとした「クリーンなクリエイティブ」で「この作品が素晴らしい」と発信していけたらすごくいいなあ、と、そしてそういう取り組みは進めていきたいです。

**田中** 僕はクリエイターの立場として「学習にその作品を使っているというのが、法的な判断の基準になる可能性がある」という様な話にはあまり納得していません。昔から、僕らも作曲するとしたら絶対ビートル

ズの曲を聴いたことがあるし、過去の作品をいろいろ勉強したり真似したりして、そういうものが礎になって、自分が作曲する音楽が出てきている筈です。でも、ビートルズの権利を侵害していないでしょうか？

**菅野** はい、そうですね。

**田中** でもAIがやっていることも同じで、学習は、例えば音大に行つて過去の音楽を学習するのと、AIにそれを学習させる、その違いが定義として一緒の様な気がします。例えばこの曲をこのAIに食べさせているから、これに似た曲が出てきたら権利侵害している……。

**菅野** これ、実はふたつ段階があつて。先程の勉強させる段階というのは、AIにデータとして食べさせる分には、基本的にはいいよ、と。AIに食べさせるのも、他人のものを勝手に使っているのと同じですよ。でもまあこれは一応、著作権法上OKになっているのです。

**田中** それはOKなのですね。

**菅野** ええ、ことさらビートルズの曲を作りたのでビートルズの曲ばかり食べさせる……のは駄目ですが。基本的に様々な大きな所から一



一般的に選んでくる分にはOKです。で、「それがビートルズ風の曲を作った時にどうなの？」という話ですよ。作った段階でどうか、という話で、これは生成AIがやろうが、田中さんが独自にビートルズ風の曲を作ろうが、似ていたら駄目という話で、実はあまり変わらないのです。

**田中** 著作権的にいわゆる「パクリ」と言われるものを法律的に、これは模倣で駄目ですよと裁判所に認められるハードルは結構高いと思いますよ。小林亜星さんの裁判でもそうでしたが、同じメロディーが4小節続いていたら……？ そんな事誰もやらないでしょう（笑）。だから裏では1小節ぐらい同じメロディーがあつて、何となく雰囲気似ているなどという曲の場合、出版社間で協議が行われて、著作権のパーセンテージの何%を払ったりすることは、判例とは別に会社対会社の「分かるよね」ということで、ありますよね（笑）。

**菅野** 採めたくないですからね。

**田中** 一定の、オフィシャルな法的判断基準とは別のルールで動いている部分も、水面下ではあつて、玉虫色の解決をしていることはまあ沢山

ありますが、それをAIが作ったという様になると、そういう解決ができなくなつて、採め事が増えそうだなと思つています。

**菅野** なるほどね。

**田中** 裁判で本場に「贋作」として認められるハードルが結構高いので、全く同じではなくても世の中には結構あります。「うっかり似てしまった」曲も含めて、玉虫色の解決をして和解するのが一般的で、そういうケースが結構あります。それは大企業対大企業だから成り立っている話で、AIが作ったものというのは、個人やインディペンデントなレーベルの場合が多いので、そういう解決ができなくて、採めごとが増えそうだなと思います。そんな時には、AIに強い弁護士の仕事が増えそうだなと思つて（笑）。

**菅野** あはははは、確かにそうですね。YouTubeさんや事務所、個人のケースも手掛けますが、普通事務所が間に入って済ませる様な採め事がいっぱいありました。今はもう何か力の論理で戦つて終わる、健全ではないと思いますが、それに似たような事が、多分起こってくる

と思いますよ。

**田中** 今までは芸能界も大きな事務所がきちんとあつて、事務所同士やテレビ局とで解決できたけれど、大きい事務所がどんどん崩壊して、個人で独立していくことが増えました。スキャンダルが増えて、昔は「まあまあ」でできたことができなくなつて、全部が世の中に出てきてしまふ。正しいか正しくないかはどちらでもいいですが、そういう移り変わりが実際にあつて、音楽業界もAIの出現でどんどん変わつていて、弁護士の先生の出番が増えていく気がしますね。

**菅野** 他の業界も同様ですが、新しい問題がどんどん増えて、今後専門性を高めていくことが弁護士業界でも生きていける秘訣なのかな、とは思っていますね。

## AIとともに 生きる未来

**田中** 今気になっているトップランカーで、どんな曲でも高く作れる欧米の音楽生成のAIとして「スノー」という大きいAIがあります。僕ら

が聴くと生成AIで作った音楽の音質だと判りますが、iPhoneやイヤホンで聴いている普通の人には多分判らないと思います。そこに今、ソニーとユニバーサルが「著作権侵害だ」と訴えを起こして、スノーはまた1000億ぐらい調達したのかな？ それはお金を払う為だと……（笑）。要は「大手のレーベルに永続的に著作権使用料を年間何億ドルと払うから、やらせてね」という感じで、それもひとつの解決方法というか、日本はこの動きで成り立っているのかな、と思つています。そうすると既存の著作権を持っているクリエイター皆がAIの発展と共にマネタイズできる様な仕組みになると思つているのですが。

**菅野** それを日本でやると、やはりJASRACみたいな所が動くというのが、いちばん分かり易いでしょうね。

**田中** JASRACも、若手の人達が少しづつ仕組みを変えようと、AIのルール作りもしようとしているので、JASRACが動けば法的なものも少しは変わってきたりするでしょうかな？



**菅野** その法的なものも含め、多分ルールづくりが業界でされていくだろうと思います。先程の欧米の解決方法だと、今後の業界の発展という観点からはちょっと問題がありそうかな、と思いますね。ある種中立的

というか、公共的な役割を果たせる所がそういう権利処理をしてあげるのが、いちばん分かり易いシステムかなと思います。

**田中** このAIの時代を、弁護士さんの立場から見てどういう風に考えておられますか？

**菅野** AIを我々が使うという観点もありますし、新しい問題が出てくるといってもありますが、いずれにしろこれに適応するなり理解を深めない生き残っていないでしょうね。新しい「案件」としては権利周りがいちばん大きいのかなと思います。だいたい、AIの出現で社会の構造は変わりますが、それが火種になるのは今のところデータを生成する等の話に限定されています。これが例えば、自動運転や工事現場ロボット、介護ロボットとかになるとその分野によって「AI×介護」とか「AI×工事」の様に業界との掛

け算で出てくる問題があると思います。

**田中** 社会的にそうなりますよね。現状、AIはコスト削減のツールとして捉えられていますが、実はそこだけではなく新たな価値を創造するツールだというのが浸透してくると、使える分野が変わってきます。皆がAIに対するリテラシーをちよつとずつ高めていくということが確かに大事ですね。

**菅野** これが一歩進んでモビリティだとか建設等の全く関係ない分野の専門弁護士がAIについて考えないといけないタイミングがどこか来ると思いますね。

**田中** AIが仕事をどんどんできるようになって、要らなくなる人間が多くなるというマイナスの部分がありますが、それをプラスの方に、AIがどうこの世の中の役に立っているのか、社会に対する考え方も変えていかなければ……。AIの発展前提に自分が何をするか、マインドセットの変化は大事ですね。

**菅野** やはり切り替えない人も多くて……。弁護士業界でもいまだにFAXでやりとりして（笑）年配の弁

護士の先生の中には自分でパソコンを打てないから口頭で文章を話して、誰かがそれを打つというやり方をしている人達もありますが、だんだんAIでも同じ様な事が起こっていくのかな。

**田中** 時代の流れですよな。

**菅野** 法律一般のことですが、その案件に対しての具体的妥当性という、具体的な解決を図ろうと思うとルールが曖昧になって、基準を明確にしようと思うと融通が利かなくなります。

**田中** それでは永遠に解決しない問題ですね。中国は圧倒的にAIが進んでいます、これは著作権の意識

が低く、やりたい放題できたからです。日本は著作権等の権利意識が高いので全然AIが進んでいない、「どちらがいいの？」問題ですよ（笑）

**菅野** これは政治体制のメリット、デメリットの話になりますね。

**田中** AIは新しい産業ですからそこに対する意識を皆が高めていかなければ。

**菅野** ところで今、作曲にどれくらいAIを使っていますか？

**田中** アイデア出しということに関

して言うと、「こういうアーティストのこういう曲を作りたい」と、ほぼ100%、1回AIに訊きます。何となく歌詞も入れて10曲ぐらいは生成します。アイデアを得たいというか……。

**菅野** そこからピックアップして？

**田中** というか、自分のインスピレーションを膨らませる為のきっかけ、アイデアの源泉として結構使っています。

**菅野** お客さんの中に「こういう事が起きた時に引つかりそうな法律は何ですか？」と1回AIに訊いてから持ってくる方も増えていますよ。

**田中** 普段全然使っていない法律とか気にしていない法律をAIに訊くとね、「ありますよー」みたいな、ね（笑）ところで菅野さんは弁護士さんとして、今後、将来、どういう風にやっていきたいとか、野望みたいなものはありますか？

**菅野** 「野望」ですか？

**田中** 夢でも野望でもいいですが……（笑）

**菅野** そうですね、うちの事務所に関わってくれた人を幸せにしたいと



対談を終えて

いうのが、いちばんです。働いているスタッフや弁護士もそうですし、依頼して下さる皆さんも。一定の信頼と深刻な問題を抱えて来られる方が多いですし、また「新しい事をやりたい」という人もみんながどうすればハッピーになれるかを考えて日々対応していきたい、と思っています。

ますね。だから、単純に適法か違法かで「適法にやっていきましょう」というより、何がいちばん皆の為にいいのかという解決策を模索するというのが大事かと思っています。

田中 すごいヒューマニズムですね。

菅野 正直、弁護士という資格はありますが、やはりサービス業ですから、何の為にやっているのかというと、本来社会は自由なのに、皆のいろいろな権利等がぶつかり合ってしまうからルールを設けましょう、というところだと思います。法律に縛られてやりたい事ができなくて不幸になるというのは、本末転倒かなと思うので、そこを忘れないようにしたいと思っていますね。

菅野 僕は楽しいですよ。ただ、弁護士というのは皆さんが思っているよりバリエーションがある仕事なのです。様々な弁護士がいて、離婚ばかりやっている人もいれば、企業の契約書ばかり書いている人もいます。以前の事務所では、弁護士が500〜600人いたと思います。裁判所に行ったことがある弁護士はその内、多分100人ぐらいでしょう。残りの人は行ったこともないし、外部へ商談に行くこともほとんどなく電話等で済ませて、ということもあると思います。ファイナンス系の弁護士とかはそういう感じだったります。僕と同じようにこういった様々な事を新しい人達と直接会ってやる人もいますし、ただひたすら

田中 一般の人はなかなか弁護士さんに接する機会がないので、弁護士さんに対する硬いイメージというのがありますね。そういう時にそんな風に寄り添って、「幸せにしたい」というメッセージは、非常にいいと思いますし相談しやすいですね。大きな声でアピールしていただきたいですね(笑) 弁護士の仕事は楽しいですか？

菅野 あははははは。そんなことないでしょう？ 嘘でしょう？ 普通の人からするとすごく夢があつていいなあ、みたいな感じがしますよ。

田中 作っても作っても、まだ作らなきゃいけない、締め切りがありますからね。永遠に、締め切りとずっと戦っているわけです……。

菅野 僕の仕事には区切りはありませんが、ただやはりクリエイティブなことはあまりないので。どちらかというと、来た球を打ち返す系が多いですね、弁護士というのは。そうすると、「産みの苦しみ」みたいなのは全く違うかなと思います。

田中 これからも多くの人をハッピーロードへと導いてあげて下さい。今日はありがとうございました。

菅野 こちらこそありがとうございました。